

## 巨樹の「寒翁が馬」

日本列島には巨樹——大人の胸高での幹周りが三メートルを超える樹木——がたくさんある。環境省（当時は環境庁）が1988年におこなった調査ではその総数は五万五千本余りという。京都市内にも、京都御苑を中心に二百本以上の巨樹がある。これほど古くから多くの人間が住んできた土地にしては、奇跡的ともいえるほどの数である。

一本の苗木が巨樹になるには数百年から時には千年を超える時間が必要だ。彼らは山火事や落雷、台風、地震など幾多の自然災害に耐え、また競争相手との日光や栄養の奪い合い、病魔や害虫による食害にも耐え、今に至っている。さらに彼らは、人による伐採という災いからも生き延びてきた、まさに貴重な存在である。いまはバイオの時代と人はおどろくが、巨樹を巨樹たらしめた時間の壁はいかにバイオの技術をもってしても購うことはできないのである。

各地に残る巨樹にはそれぞれ風格があると思う。同じ種に属するものでもその容姿はみな違う。くねくねうねった枝ぶりの複雑さは、巨樹たちの枝一本一本が、隣の樹木やあるいは自分らの他の枝とのかかわりの中で、天に向かって伸びてきた歴史そのものを物語っている。枝たちがみな勝手に伸びたのでは、全体のバランスは保てない。巨樹たちは、幹をよじってその巨体を支えてきた。そのことは、幹の表面に刻まれた節目がらせん状となり、ときには幹を一周も二週もしていることからあきらかである。もし百年を一分に縮める超微速度カメラがあったらなら、その身のよじりは螺旋を描いて天に昇る竜の姿をも髣髴とさせる、はげしいものであるに違いない。

台風による大風やまれに起きる大雪などは瞬時にして体のバランスを崩してしまう。巨樹たちは、そのつどその巨体を動かし、体全体のバランスをとり続けてきた。いや、そうした幾多の災難が、彼らのからだのバランスを築きあげてきたというべきであろう。植物は動かないものと思われているが、人間の目にはそう見えようとも、時間のスケールをうんと伸ばしてみれば、植物もまた激しくその身を動かしているのである。

巨樹のなかに異形の相を呈するものがあるといわれる。異形の相はまさに、長い時間を生き抜いてきたものたちだけがもつ、苦難の積分値であったともいえる。しかし「異形」の相は巨樹たちの生にとって必ずしもマイナスだけをもたらしたのではない。その異形のゆえに、巨樹たちは材としての価値を見出されなかった。またその姿は、ときに、実に神々しい思いを人に与えたのであろう。よって彼らは伐採というもつとも凶暴な難を免れることができた。社寺などにおかれて手厚く保護された巨樹たちはともかく、野にあった巨樹の多くがさらされてきたのが人の経済活動による伐採の危機であった。巨樹たちが異形のゆえにその危機を逃れ生きながらえてきたとするならば、「寒翁が馬」の故事は、人のみならず巨樹たちの生にもあてはまるのである。